

【論 文】

伝承世界を生きる人々の遠野物語 100年間の受容と抵抗

金 菱 清

1. “巨額な”御花代

もうすぐ岩手県遠野にも雪が積もり、のどかだった田園風景は一変する。冬がそこまで近づいてきているなか、あるしし踊り保存会が今年一年の締めくくりとして元祖庭元の家で踊り納めをするということで出掛けて行った。この団体は一年間文化庁からしし踊りの巻物に載っている演目すべてを記録する事業の助成を受けている。

その最後の収録ということで、「しめ縄踊り」（写真1）という演目が再演された。なぜ最後に収録されたかと言うと、唄は残っていても振付けなどの映像はもちろんのこと絵にも残されていない。そのため、他の団体の踊り方を学んだり、自分たちで曲から創作するしか手段がなかった。すると解釈の仕方によって2種類の踊り方がでてきて、どのように踊るかで熱い議論が交わされた。前者の他の団体から学ぶ場合、縄を鹿の角で切る所作が入る。ところがこの芸能団体は「巻物」を重視していて、そこには「縄をとうて」というくだりが書かれてある。この「とうて」には、縄を「取って」という意味か、あるいは縄を「通って」という意味として採るのかのふたつの解釈が成り立つ。しかし前者の取ってという解釈を採用したとしても、「切る」という文言ではないために、巻物と所作がずれているということになった。

このような議論を30代の若い世代が長老を巻き込んでしていた。芸能がすたれるときはすたれてよいと言い切る。けれども巻物と踊りがずれている場合は、巻物は忠実に再現するべきであるという考えで、誰であっても物が言えるところがこの団体のいいところだと私に伝えてくれた。上意下達で伝承されれば民俗芸能は自然に淘汰されるという考え方である。しかし、そういう低い水準に自分たちの芸能は陥りたくないという意思の表明でもある。

このような話を聞いたのも踊り納めの飲み会の席であったが、家元では旧住居を開放してお酒がふるまわれる。保存会の会長からぜひ参加してくださいということで、何も持たずにお邪魔するのは申し訳ないということで、御花（御祝儀）をふたりで三千元ばかり包むこと



写真1. 本家で復活した「しめ縄踊り」を披露する板沢しし踊り(2011年9月23日)



写真4. 国選択無形文化財指定の看板を旗印に踊る青笹しし踊り(六神石例大祭2011年9月23日)



写真2. 口上(御花代)を読み上げる(2011年9月23日)



写真5. 家元の踊り納めで復活した「しし酒盛り」を披露する板沢しし踊り(2011年9月23日)



写真3. 本家で「位牌誉め」を披露する板沢しし踊り(2011年9月23日)



写真6. 柱掛り(六神石例大祭2011年9月23日)

になった。お祭りによっては氏名と金額を紙で貼りだすところは多くあるが、今回はしし踊りの演目の最中に御花を出した人全員の名前を読み上げられる形がとられた（写真2）。そこで事件が起こった。事件といっても同僚と私だけの小さな大事件である。「〇〇様 右は十万円也」。「〇〇様 右は十万円也」。大声で50名ほどの名前が次々に読み上げられた。その金額の大きさを聞いて私たちは、穴があったらはいりたいという気持ちで、三千円というのは少なすぎたと思ったのである。ずっと十万円台が続き、五万円に下がってもまだこの金額である。

ただし私はちょっとこれはおかしいのではないかと疑いをもち始めた。というのも、本家が十万円を出すのはわからなくもないが、自元の郵便局長やJRの駅長が五万円も御花代として出す金額としては大き過ぎると考えたからである。もしかして単位を10倍に嵩上げし読み上げているのではないかと推察して聞いていると、私たちの御花代の番がまわってきたときに（私の名前が間違われて呼ばれたが）、自分たちのことを読み上げていることがわかった。そこでは三万円と読み上げられたので、やはりと確信をもつことができた。その後も金銭以外にもお米やお酒を差し上げた人がいたがその方々の読みあげ方も、若い種フクベは何度か間違えていたが一升ではなく、一斗と読み直していた。

どうやら私の同僚は最後まで謎が解けなかったらしく、読み上げが終わってから私に「〇〇日報（新聞社）でも三万円だしているのに三千円ではまずかったんじゃないかな。私たち少なすぎたから読み上げられなかったん違う」と恥ずかしそうに耳元で囁いてきた。

同僚も私も関西出身で、普段おばちゃんいくらと尋ねると、何百万円ですというオーバーにいつている冗談を東北にしばらくいるためにまさか東北で儀礼の最中にそのような冗談はいわないだろうと高を括くっていたのかもしれない。あとで関係者に確かめると、もらった人がいい気持ちになるように、10倍にして誉めるのだと教えてもらった。そういえば、しし踊りの唄ではあらゆるものを誉める。庭誉め、石段誉め、お宮誉め、館誉め、馬屋誉め、位牌誉め（写真3）…。掛け合いのなかで相手というものをよくみている。私たちもそういう感謝の対象だったのかもしれない。でも知らない人にとっては、逆に自分が小さく見えてしまう。遠野物語にある「巨人」伝説もこのような効果子どもたちに巧みに用いているのかもしれない。

2. 「遠野物語」を生きる人々

柳田國男が記した「遠野物語」は発刊1910年（明治43年）から100年目の節目を3年前に迎えた。本論文は、「遠野物語」を文学作品としてではなく、伝承世界に生きる人々の

100年余りの経験から「遠野物語」を読み返すことを目的とする。

人々の川と里と山とのむすびつきおよび生きられた伝承世界から祭礼祭祀、社会組織および流域環境のあり方を考えフィールドワークを重ねてきた。100年という一世紀の間、遠野地域が経た変化は著しい一方で、100年前と変わらぬ民俗文化が今なお存在する。それが獅子(鹿)踊りをはじめとした民俗芸能である。遠野郷では40芸能団体による民俗芸能が今日にわたるまで伝承されるとともに競合状態にあり、活発に伝承活動が行われている。

遠野の文化は遠野物語に「馬千匹、人千人の賑(にぎ)はしきなりき」とあるように、鉄道が敷設されるまでは物流の拠点であり古今東西いろいろなところから人や物資がやってきた。民俗芸能もまた伝播していくことになるが、文字を書ける古老がしたためるため、その人が間違えば、間違ったものが伝わる。しかし、その中にはわざと間違える箇所もある。民俗芸能はある種腕の競いあいなので、神楽でも田植え踊りでも芸能の台詞の部分はあまり聞き取れないようにしゃべっている。いいセリフを盗まれないようにするため、巻物として文章には起こしているが、実際詠む順番はバラバラにしてあり、関係者しかわからないようにしてある。筆で認めていたり、不鮮明なところもあり、本当は、デンデンデンとやるべきところをデデデと書いてあったりする。余所のものに盗まれても本当の太鼓は叩けない仕掛けになっている。理解できる人がみれば、デデデと書かれてあればデンデンデンと叩ける。あそこはいい言葉をいっているとか評判になって、では、そこに頼みましょうとなって稼ぎとなる。

3. 伝統芸能における閉鎖性と変化

このような芸能集団における伝統を受け継ぐ「閉鎖性」はどこから派生したものなのか。昔は長男しか踊れず、二男・三男は他の地区で踊りを持って婿にいかれると踊りが盗まれることで排除された時期が長かった。女性が他の地域に嫁に行くと、踊りも一緒に余所に嫁に行くのと同じことになるため、堅く守られていた。唄のなかにも、「嫁子を断ち、踊りみたから板戸を閉めて、板戸のなかでささらさ拍子」という下りがある。誰が聞いても踊りたくなる。嫁も一緒に踊りたいが、嫁であるのでできないので、板戸を閉めてそのなかで踊って楽しんでいるという唄さえ残っている。

さらに昔の人たちは一派を組んで農作業がそのグループになっていた。木炭産業も出稼ぎもなかったので、冬には山に閉じこもって、炭焼きが本業であった。農作業が終わって自分の炭窯をもって、山を共同で購入して、山が終われば次の山に行く。夜は火の調節がないから時間を余すことになる。太鼓などをもって行ってそこで練習をした。11月から春まで山

から下りない。炭窯の温度だけで暖かくなるので萱で寝ることができる。

このように部落総出というよりは、郷土芸能は一派を組んで行ってきた。春から秋まで庭元は師匠としてつき、子どもたちに教えて祭りに来る。炭焼き帰ってくると春祭りがあるために庭元に行き練習をする。とりわけ、神楽は社会保障としての機能があった。というのも、貧乏な地区に神楽がでたと考えられている。「ほいど（乞食）」神楽とも言われ、大槌の方面まで行って踊り、そこでいただいたお米は家の方に送る。神楽の仲間に分け合って生活の足しにしたのである。このように芸能は、単なる郷土芸能ではなくて、民俗芸能だと考えに根付き、生活と結びついたものと捉えられているのである。

かつての閉鎖性のなかで維持されていた民俗芸能は、担い手不足やその存続維持の困難さから、かつての閉鎖性を解いている。生活や儀礼的な側面からイベント的な要素が大きくなっている。青笹しし踊りは、元々3団体（糠前・下中沢・中沢）あったものを昭和40年代に一本化統合し保存会を結成し、県の指定文化財を受け、国選定になった（写真4）。他方、早池峰しし踊りもいったん3団体（東禅寺・張山・上柳）が一緒になったが、地区的に離れているために、一か所に集まって練習となると難しく、結果3団体に分かれている。

前者の青笹しし踊りは、全国青年大会（スポーツ・文化）郷土芸能の部の出演を機に踊りを統一している。3団体のどれというのではなく、イベント化させたのである。本来しし踊りは庭で踊る芸能なので輪で踊るのが本流だが、舞台は一方からしか見えないので、舞台用にきれいにみえるように編成し直している。全国大会が終わると元に戻すはずだったが、見せるほうがいい形なのでそのままになった。

「見る人がいれば、それなりの緊張がいい踊りをみせようという思いはわいてきますよね。同じ条件だとすれば、遠野まつりの場面で踊ると奉納の神社の側の前では観衆がいる数が同じだとすれば、やはり神社の方がやはり思いが違うのではないか。神掛かりの、カリスマ的な存在を自分に持たせるかもしれないね。ようするに踊っているなかで「神になりきる」思いがあるかもしれない。遠野まつりのような場面だとすれば、ひとつの芸能としてうまく演じようというのが先行するように思います。そういう違いは私だったらあります」（2010年11月5日佐々木國允・郷土芸能協議会会長）

協議会会長の言葉にもあるように、遠野の民俗芸能を下支えしているものは、表面的には、イベント化する民俗芸能である一方で、神社祭礼を含めた儀礼の重視である。民俗芸能の伝承がどのように続けられているのか、あるいはどのような方向に向かっているのかがこの両方を捉えることでみえてくる。

4. 民俗芸能の復活と伝承のされ方

獅子踊りが間違っただけ踊られているものもたくさんある。遠野物語の119話にも、「此橋を見申せや、いかなもをざは蹈みそめたやら♪」とあるが意味はわからない。亡者という風に解釈できるが、ブーズ弁であったり、聞いたものをそのまま書き写したりしているからである。伝統芸能を担っている当業者たちもそのまま直さないで歌っているものも多い。直してもいいが、直していけばきりがない。たとえば、館誉めのときに、伝承されている唄でいえば、「前に来てこの館を見申せや、葦茅葺の館なり♪」とある。これ瓦ではないかということで、瓦葺で歌えばいいのかということになるが、そのようなことはせず、昔の伝承されたまままでいくことになる。

伝承活動しようとするものが、その映像を見ればわかるように楽譜におとしたり残そうという考え方でやっていた。ただし、五線譜におとすことは基本的には難しい。たとえば、ウツギという白い花を咲かす卯の花が土地の境に植えている木がある。中が空洞になってこれを用いて笛を自前でつくる。音は保存会によって、この長さ太さという形で伝承されてきているからである。唄は短歌でできていて、 $5 \cdot 7 \cdot 5 \cdot 7 \cdot 7 = 31$ 文字だが、しし踊りの場合は32文字まではよしとしている。遠野古事記のなかに1字余りの掟が載っている。

民俗芸能として伝承する一方で、廃れてしまった演目の復活も近年活発になってきている。伝承のなかでとりわけ興味深いのが「しめ縄踊り」と「しし酒盛り」の復活である。巻物には書かれてあるが、教わっていない。今生きている人から聞いてもわからない。しかしながら唄からすればだいたい想像がつく。

4-1. しめ縄踊りの復活

そこで保存会でしめ縄について議論をした。しめ縄は結界としてこちらからは一般の社会と別な世界として区切る。国語辞典レベルではそこまでしかでていない。次にルーツを探った。神楽はどうやって踊っているのか。ユネスコの指定を受けている大迫の岳神楽では縄は切らない。大償の神楽は切るということにそれぞれ分かれている。どうして切ったり切らなかったりするの。古事記や日本書紀、日本文化の根っこみたいなものを踊りで表現している。神楽から始まったものが、狂言や神楽、浄瑠璃などに発達し、そのあとにしし踊りが出てきた。

遠野の駒木しし踊りではしめ縄を切る。土淵の踊りも切っている。それに対して板沢のしし踊りでは「切らない」選択をする(写真1)。やっていないものを復活させてどうするかというのは、一世代前ならば一番長老の人たちがこういう風に決めればその通りになった。

ところが現在では、全部オープンで、「俺が調べたらこうだ、お前たちどう思う。こうじゃないですかみたいな」、酒で清めながら彼は一年間の歳月をかけて決めた。

「郷土芸能とは生き物だと思う。すたれるときはすたれてよい。巻物と踊りがずれて
いる場合は、巻物は忠実に再現するべきだと思う。ここの板沢しし踊りのよいところは、
誰であっても物が言えるところ、そうでないと上意下達であれば自然に伝承されていか
ない。おかしいところは指摘する」(2010年11月23日若手T氏)

一回はこういうふうなことを考えているということ保存会の代表が言うておく。飲んだ
時に思い出して、結界だと、みんなしめ縄というものを調べてくる。意識が高まったあたり
に、神楽の場合は、切る／切らないという風に披露する。駒木とか土淵みたいに切る風にす
ればすぐにできるけどもあれでいくかと問いかける。それとも切らないでやるということに
なれば、何かどういふ風にとったらいいのかちょっと考えてみるという風に議論をふる。

結論として辿りついたのが切らないという選択だった。天照が出たところで、しめ縄でも
う二度と入ってはならないというのがしめ縄の原点ということになる。神木にしめ縄をはる
のは神の呼び代という降臨の意味もあるという独自の解釈を行う。

4-2. しし酒盛りの復活

次に「しし酒盛り」の復活である(写真5)。しし酒盛りは普段踊る機会はまったくない。
初夏の祭りであるお日出神社のおまつり＝上郷まつりを踊り初めにしている。奉納の祭り
として五穀豊穡や無病息災を祈ることが踊りの中心になる。あとは里に下がってお花をもらえ
るところに門付けにいつて庭踊りを行う。柱掛り(写真6)とか雌じし狂いとかどれかの演
目をやっている。お花を出した人の希望ではなく保存団体の方で決める。流行があるので、
柱掛りでやるのが主流であった時期もある。雌じし狂いは3人でやらなければならないが、
柱掛りは、種ふくべと二人でやれて手軽だったこともある。したがって、雌じし狂いを見る
機会が少なかった時代もある。ただ附馬牛のしし踊りは、何かやるときは雌じし狂いをや
っていたが、「雌じし狂いは、神社仏閣ではやるなと巻物に書いてある」という意見がでて、
みんな急遽演目を変更して柱掛りになった。盛りなので神社仏閣では相応しくないという解
釈である。

どうしても、春祭りや秋祭りが主体になっていくと、奉納が中心になっていき、しし酒盛
りとかしめ縄踊りは踊る場面があまりなく、廃れるというよりは忘れてしまうことが大き
かった。

そのようななかで、しし酒盛りを披露したのは、遠野物語100刊の記念祭で13のしし踊り団体が遠野物語を5つに分けて、どの保存団体もどれかをやることになって、板沢は2回しし酒盛りを披露することになった。昭和10年未満の人たちが踊った頃にしし酒盛りが踊られたので、ほとんど現存するものはなく、まったく唄を頼りにしてどういう振りにするのか実際に行くしかない。手がかりはゼロに等しいが、歌詞からするとだいたいの流れが推定される。たとえば、お囃子（口拍子）は、雌じし狂いの太鼓と巻物に書いてあるので、その通りやることになる。あとは唄によって、ここは喜ぶ表現という基本の形が決まっている。それを組み合わせて流れができる。

しし酒盛りが特異なのは、保存会の踊り手のメンバーだけでやるのではなく、ししと一緒に飲んで楽しむことである。しし酒盛り以外は他の観客が踊ることはないが、見ている観客と一緒に踊りたくなくて踊りだすことはよくある。遠野祭りが八幡宮でできた最後の時期に、背広来た人が踊り始めた。はじめ酔っ払いだと思ったけども、バスで待っていて一滴もお酒を飲んでいなかった。踊りの流れがわかっている人がいてそういう人が入ると盛りあがる。踊りの復活を支える要因には、観客と踊り手双方が共同でその場の雰囲気と共有できる場面を創出させる意味が大きいと言えるだろう。

5. モノを奮い立たせる技法

早池峰神社の本殿の片隅、普通の人には気付かない場所に金勢様（コンセイサマ）の祠がたっていた。覗いてみると立派な男性の物（ブツ）が何体か立てられていた。しかし、施錠がされてあったので、格子の内側から同行の者と写真を撮っていた。すると、一人のおじさんがひょこっと私たちの前にやってきた。そこで、コンセイサマのことを尋ねると、どこかの社長がこのコンセイサマによって会社が成功したとのことである。かなりのご利益が期待できるらしい。

ただし、おじさんが語るには、あまりにもコンセイサマの勢いが強いものだから、施錠をして外にでないようにしているというのである。これを聞いた瞬間、コンセイサマがカタカタ、ガタガタと音を鳴らして動き出したのである。施錠をする意味は、おそらくというより普通に考えれば、賽銭泥棒という「外」から不審者の侵入を防ぐためのものである。しかし、彼が語りだした論理は、「内」からの勢いを沈めるための“結界”だったのである。結界をはることによって内側の物質的存在は生き生きと私たちの前に精神的な存在として現れたのである。もし出入り自由ということになれば、逆に動き出さない＝勢いが無い、したがってご利益がないということになるであろう。

この内と外の逆転によって、コンセイサマは静から動へと勢いを伴ったものとして魂が込められたのである。このおじさんからはもうひとつよい話を聞いた。「ここの神様は一度の過ちなら許されるということで、訪れる人も多みたいだよ」とおっしゃった。むろんこの話は、遠野物語にも出てくる早池峰の三山伝説を下敷きにしている。3人の姉妹の女神は、最初に天から蓮華の花が降ってきた者が早池峰の主になることになって眠りにつく。明け方近く、その花は姉の胸に降ってきた。ところが末の妹は寝ずに起きていて、姉に舞い降りた花を自分の胸の上において眠ったふりをする。朝起きて、「天の神様が私を早池峰の女神に選んだ」といって早池峰に飛びたったという伝説である。しかしおじさんが話してくれたのは、盗みをしたという事実ではなく、たとえ一度の過ちを人間が犯したとしたとしてもまだ救いの手が差し伸べられるという点にある。私はこの話に魅了されてしまった。

私たちが意味的世界に生きていくとするならば、このような「物語」に転換させる力が遠野の魅力ではないだろうか。単なるモノを生きたものとして立ち上げる物語性が現在も遠野に息づいている。伝承芸能も、演目の伝承が間違ってもそのまま伝えるということに意味があるのと、他方でこれまで伝わっていなかった演目が長い議論の末に新しく生み出されたのである。この伝統芸能における「保存（伝承）」と「創造」とが並列して立ちあがっていることに遠野の現在がある。

付記：本論文は、日本証券奨学財団の平成23・24年度研究調査助成金および平成23年度東北学院個別研究助成金による研究調査結果である。記して感謝申し上げます。

参考文献

- 赤坂憲雄, 2010, 『増補版遠野／物語考』 荒蝦夷
青笹しし踊り保存会, 2009, 『青笹しし踊り』
石井正巳, 2009, 『『遠野物語』を読み解く』 平凡社新書
石井正巳, 2003, 『遠野物語辞典』 岩田書院
岩本由輝, 1983, 『もうひとつの遠野物語（増補版）』 刀水書房
門屋光昭編, 2002, 『遠野の民俗芸能—シシ・シカ・ゴンゲン 遠野のしし踊りをめぐって』
遠野市博物館
菊池照雄, 1989, 『山深き遠野の里の物語せよ』 梟社
鈴木久介, 1993, 『遠野市の歴史』 熊谷印刷出版部
梅原猛, 1994, 「人と神々の声のこだまする遠野」『日本の深層—縄文・蝦夷文化を探る』 集英社文庫：91-103

